様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月２４日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007 ～ 2009
課題番号：19520175
研究課題名（和文）中国の伝奇小説と日本の物語文学に関する比較文化的研究
研究課題名（英文）A comparative study of Chinese *chuan-qi* tales, and Japanese *monogatari* literature.

研究代表者
山本　登朗（YAMAMOTO TOKUROU）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：40210538

研究成果の概要（和文）：日本の物語文学が、同時代の中国の伝奇小説とどのような関わりをもって成立したかを考察し、東アジアという大きな視野の中にその成立を位置づけることが本研究の目的であったが、考察の結果、『遊仙窟』という作品が平安時代の日本文化全般に大きな影響を与え、また同時に中国中唐期の伝奇小説にも大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。『遊仙窟』を中心にしたひとつの大きな文化圏の存在が確認できたと考えている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of my research was thinking about relationship between Chinese *chuan-qi* tales and Japanese *monogatari* literature, and positioning those in the culture of East Asia. The upshot of research is that *Yusenkutsu* influence strongly Japanese culture in Heian period, and at the same time, that work influence Chinese *chuan-qi* tales. I assume a sphere of culture influenced by *Yusenkutsu.*

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：日本古代文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：物語文学、伊勢物語、源氏物語、伝奇小説、遊仙窟、鶯鶯伝、歩飛烟、かいまみ

１．研究開始当初の背景

日本の物語文学は、平安時代にはじまり、『竹取物語』『伊勢物語』などのすぐれた作品を生み出しながら発展を続け、最高峰ともいうべき『源氏物語』に至り、その後も数多くの作品が生み出され続けた。この物語文学の成立や発展に対する中国の伝奇小説からの影響は、これまでも数多く指摘されていたが、

それらの多くは部分的な類似の指摘や、あくまでも個々の作品にかかわる発想や趣向の影響関係の指摘に留まっており、そこにはまだ、より全般的、総合的な関連について考えるという視点がまだ十分に確立してはいなかった。

さすがに『源氏物語』については、白居易の「長恨歌」など数多くの中国文学からの影響が指摘されてきたが、それらもまだ、文学状況全体の比較に基づくとは言えない段階にあり、『源氏物語』以前の、いわゆる初期物語については、研究状況はさらに未発達な、素朴な段階に留まっていたと言わざるを得ない。

たとえば、『竹取物語』の構想が、中国のチベット地方に伝わるとされた民話『斑竹姑娘』によるものとされたことなどは、その典型であったと言ってよい。全般的な影響関係の考察に支えられていなかったこの単発的な影響説が、一時は大きな反響を呼んだにもかかわらず、やがて否定されるに至ったことは、これまでの比較・影響研究の限界と、今後必要とされる方向性を、明確に指し示していたと言ってよい。

本研究は、このような研究状況をふまえつつ、日本の物語文学と中国の伝奇小説の影響関係について、より全般的、総合的な関連を考えるという視点に立ち、単なる両者の類似の指摘にとどまらず、比較文化学的に日中双方の文学現象全体を位置づけることを目的として企画された。

２．研究の目的

（１）平安時代における物語文学の出現と発展が、ほぼ同じ時代に中国で盛んになった伝奇小説とどのような関わりを持っていたかについて、具体的かつ総合的に考える。

（２）物語文学だけにとどまらず、平安時代の貴族文化は、それまでの奈良時代の文化とは、さまざまな点で大きく異なっており、それがそのまま、規範的な日本の古典文化として継承されてゆくが、そのような平安貴族文化が、当時の中国の文化と、どのように関わりながら成立したと考えられるかについて、具体的かつ総合的に考える。

（３）中国の唐代伝奇小説の中でも、特に『遊仙窟』に焦点をしぼり、詩の贈答という掛け合い文芸的な内容に特徴を持つ『遊仙窟』が、掛け合い性の強い文学作品として日本人にどのような影響を与えたかについて、両国の掛け合い文芸の歴史を考えつつ考察する。

（４）物語文学は当初から絵画と深い関わりを持って成立したことが指摘されており、早くから絵を伴って鑑賞されたことも知られているが、そのような絵画をも含めた、日中双方の物語・伝奇の享受の有様の比較を通して、両国の文化の同一性と差異について考える。

３．研究の方法

（１）国外での資料調査…台北・台湾大学、ダブリン・チェスター・ビーティー・ライブラリなどの在外資料を調査して研究に役立てるため、数度にわたる海外調査を行った。そのうち特にチェスター・ビーティー・ライブラリでは、「伊勢物語絵巻」をはじめとするすぐれた絵画資料を調査することができ、有意義な成果をあげることができた。

（２）国内の資料調査…国文学研究資料館、陽明文庫、鉄心斎文庫など、数多くの機関・文庫で、多くの資料を収集することができた。特に『伊勢物語』のコレクションである鉄心斎文庫で閲覧した『伊勢物語』の絵巻や古写本を通して得た成果は大きかった。

（３）海外の研究者との交流・連携…カナダのブリティッシュ・コロンビア大学のモストウ教授、台湾大学の陳明姿教授、朱秋而助教、アメリカのコロンビア大学のハルオ・シラネ教授、およびヴィーブケ・デーネーケ准教授など、数多くの海外の研究者と意見交換をおこなう機会を持ち、さまざまな知見を得るとともに、これまでの日本の国文学にはない、

新しい研究方法への示唆も数多く受けることができ、きわめて有益であった。

４．研究成果

（1）「『遊仙窟』文化圏」構想の提唱…今回の研究の過程で、物語文学と伝奇小説の双方の共通基盤ともいうべき『遊仙窟』にあらためて注目する必要を強く感じ、和漢比較文学会第28回大会でシンポジウムのパネラーとして以下のような問題提起をおこない、大きな反響を得た。

『遊仙窟』は、日本の文学に大きな影響を与えただけでなく、元夢の「鶯鶯伝」など、中唐の白居易の周辺で数多く作られた伝奇小説にも大きな影響を与え、それらの作品が生み出される母胎のひとつとなったことが知られている。たとえばその「鶯鶯伝」の一場面が『伊勢物語』第六九段の印象的な場面の原形になっていることはよく知られた事実だが、それら中唐期の伝奇小説は、それ以外にも数多く日本にもたらされ、たとえば成立時代がやや遅れる『歩飛烟』もまた、さまざまな形で平安時代の文学に影響を与えていたと考えられる。すなわち平安時代においては、『遊仙窟』は、もはや『遊仙窟』そのものだけではなく、その影響を受けた白居易周辺の『遊仙窟』受容の成果をも含めた形で鑑賞され理解されていたのではないかと考えられる。同じように『遊仙窟』の影響下にあったとは言っても、『万葉集』の時代とは、その受容の様相は大きく異なっていたと考えられるのである。

『万葉集』から平安時代への『遊仙窟』受容の姿の変化について考えるためには、同じように『遊仙窟』の影響を受けつつ変化を続けていた中国の文学の歴史をも視野に入れて考えることが必要であろう。同じように『遊仙窟』の影響下にあった日中の文学は、ともに変化しながら、はたしてどのように交流し、どのような結果を生んだのか、それと類似した事情は朝鮮半島をはじめとする中国周辺の諸地域でも同じように見られたのかどうかなど、『遊仙窟』の影響の広がりについて、なお考えなければならないことは多い。『遊仙窟』を始発とするそれらの影響関係全体を仮に「『遊仙窟』文化圏」と呼んで、その文化創造の動きを総体的に把握するための、ひとまずの問題提起としたい。

(2) 日本の物語や伝承は主人公の「元服」から始まるという通説が広くおこなわれているが、それが疑問であることを指摘し、それをめぐって以下のような新しい見方を呈示した。

「初冠」すなわち「元服」は、日本古来の成人儀礼をそのまま継承するものではなく、儒教的な儀礼として中国から導入され、特に平安時代になってから整備されて一般に広まったもののように見える。『伊勢物語』「初冠本」の初段は、そのような「初冠」を意図的に冒頭に据え、それまでになかった形の物語を創出しようとして作り出された、きわめて新しい試みの産物ではなかったかと考えられる。

（3）さらに、伝奇小説『歩飛烟』を手がかりに、以下のようなことがらも問題提起した。

唐滅亡後の九一〇年に伝奇集『三水小牘』中の一編として刊行された『歩飛烟』の冒頭は、「元服」したばかりの主人公が女主人公を「かいまみ」するところから始まっており、『伊勢物語』の初段によく似ている。『伊勢物語』初段の成立を十世紀半ばごろと考えることができるとすれば、『歩飛烟』から伊勢物語初段への影響はけっして不可能ではなくなる。

この類似からもうかがわれるように、『伊勢物語』などの平安朝物語と『歩飛烟』などの伝奇小説は、ほとんど同時代的に密接な影響関係を有していた可能性が大きい。それをひとつの手がかりにして、当時東アジア全体に広まっていたと考えられる、中国を中心にした、ほぼ同時進行的と言ってもよい文化交流の様相とその内容について、あらためて考え

てゆく必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①山本登朗・「「『遊仙窟』文化圏」構想は可能か―「かいまみ」と「女歌」―」・『和漢比較文学』・査読なし・44 号・2010 年・10～19 頁
②山本登朗・「沈黙と死　初冠本『伊勢物語』の結末」・『国文学ゞ解釈と鑑賞』・査読なし・74 巻 3 号・2009 年・39～46 頁
③山本登朗・「シンポジウム『源氏物語の絵と注釈』司会の記」・『中古文学』・査読なし・84 号・2009 年・69～72 頁

〔学会発表〕（計９件）
①山本登朗・「伊勢物語の享受と絵画―第一二十四段の場合」・コロンビア大学特別講演・2010 年・３月 29 日・コロンビア大学
②山本登朗・中世と近世初期の伊勢物語注釈・ＡＡＳ年次集会・2010 年 3 月 27 日・フィラデルフィア
③山本登朗・「日本の物語文学と「かいまみ」」・関西大学EUワークショップ記念講演・2009 年 11 月 26 日・ベルギー・ルーバン・カトリック大学
④山本登朗・「「『遊仙窟』文化圏」構想は可能か―「かいまみ」と「女歌」―」・和漢比較文学会シンポジウム・2009 年 9 月 26 日・國學院大學
⑤山本登朗・「『伊勢物語』初冠考」・中古文学会関西部会・2009 年 6 月 6 日・神戸女子大学
⑥山本登朗・シンポジウム『源氏物語の絵と注釈』司会・中古文学会全国大会・2009 年 5 月 23 日・国士舘大学
⑦山本登朗・「『伊勢物語』初冠考」和漢比較文学会台湾特別研究発表会・2008 年 9 月 2 日・台湾大学
⑧山本登朗・「伊勢物語の絵巻・絵本と絵入り版本」・奈良絵本絵巻国際会議大阪大会・2008 年 8 月 30 日・慶應義塾大学中之島キャンパス
⑨山本登朗・「「かいまみ」の背景―仙女譚から「伊勢物語」へ―」・国際伊勢物語ワークショップ・2007 年 8 月 23 日・ブリティッシュ・コロンビア大学

〔図書〕（計８件）
①山本登朗編（他に 24 名執筆）・竹林舎・『伊勢物語　享受の展開』・2010 年・118～137 頁
②高橋亨編（山本登朗ほか 20 名執筆）・竹林舎・『王朝文学と物語絵』・2010 年・156～172 頁
③森一郎・岩佐美代子・坂本共展編（山本登朗ほか 9 名執筆）・三弥井書店・『源氏物語の展望・第七輯』・2009 年・50～68 頁
④秋山虔編（山本登朗ほか 36 名執筆）・『平安文学史論考』・2009 年・123～142 頁
⑤山本登朗・ジョシュア・モストウ編（執筆は他に 12 名）・和泉書院・『伊勢物語　創造と変容』・2009 年・1～12 頁
⑥山本登朗編（他に 23 名執筆）・竹林舎・『伊勢物語　虚構の成立』・2008 年・89～106 頁
⑦仁平道明編（山本登朗ほか 22 名執筆）・竹林舎・『王朝文学と東アジアの宮廷文学』・2008 年・551～566 頁
⑧永井和子編（山本登朗ほか 23 名執筆）・笠間書房・『源氏物語へ源氏物語から　中古文学研究 24 の証言』・2007 年・40～51 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
山本登朗（関西大学・文学部・教授）
　研究者番号：４０２１０５８３